



ひめゆり平和記念資料館

資料館だより



第49号
2012. 5.31

目次

- 資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 『絵本 ひめゆり』特集
 - 『絵本 ひめゆり』沖縄タイムス出版文化賞 児童部門賞受賞／『絵本 ひめゆり』の誕生／『絵本 ひめゆり』を振り返って（三田圭介）／生存者の願いによってつくられた『絵本 ひめゆり』
 - 第18回日本平和博物館会議を当館にて開催／水俣病資料館語り部の会来館／野田佳彦首相来館／平和研究会開催（第2回～第4回）
- 2012（平成24）年度のイベント・事業・・・・・・ 8
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 統計に見る2011年度・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 仲宗根政善日記抄(46)・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 資料館の動き・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 声・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

資料館トピックス

■特集

『絵本 ひめゆり』



『絵本 ひめゆり』 沖縄タイムス出版文化賞 児童部門賞受賞

昨年6月発行の『絵本 ひめゆり』が沖縄タイムス社の沖縄タイムス出版文化賞 児童部門賞を受賞しました。受賞理由は「ひめゆり学徒隊の戦争体験を次世代へ継承することを目的とした絵本であり、文章も子どもに伝わりやすい表現となっている。ひめゆり学徒の学校生活、戦場、終戦と状況で絵の色づかいが変化しており、絵本としての構成もすばらしい」ということでした。去った1月24日に授賞式が開催され、理事長以下証言員、職員が出席しました。

受賞あいさつのなかで、当財団理事長本村ツルは「戦争や命の大切さ、平和の豊かさを子どもたちに感じさせるための絵本。父母のみなさんが子どもたちと一緒に読んで頂ければより戦争のむごさを子どもたちが知ることができると思っています」と、伝えるツールとしての絵本の意義を訴えました。また、絵担当の三田圭介氏は「(生存者の話は)生々しい話の連続だった。どうすればいいのかわからなかったが、自分なりにわからないことに正直になって、絵にできることをひとつひとつ探してみようと思った。子どもたちが戦争を学んでいくときに、ひとつの勉強になれば」と話しました。

今号は、受賞を記念して、『絵本 ひめゆり』の特集号といたしました。



絵を担当した三田圭介氏と当財団理事長 本村ツル

第32回沖縄タイムス出版文化賞

絵本ひめゆり

ひめゆり平和祈念資料館文
三田圭介

(公益財団法人沖縄県女師・高女ひめゆり
平和祈念財団、ひめゆり平和祈念資料館)

学徒隊の思いぎっしり

児童部門賞



小さい子にもわかりやすい文章で書かれている。ここまで練り、絞るのに苦労されたと思う。絵で語る場面はしっかり絵に語らせ、文は前へ前へと進んで行く。絵本の構成も良い。見開き一面絵のページが印象的に使われている。絵と文字のバランス、文章の位置など、丁寧に創られた絵本である。

約半年間の凝縮された時間と、それからの長い年月の生き残ったひめゆり学徒隊の思いがぎっしりつまった絵本である。

受賞の言葉

あどがきに、22年前にひめゆり平和祈念資料館を作り、自らの戦争体験を伝え続ける中、子どもたちに理解しやすい方法を模索する中で、この本が生まれると書かれている。親も子も沖縄戦を知らない世代になった今、時宜をえた出版といえる。これまで同じ思いで書かれた絵本も多くあったがこの本は、沖縄戦の実相を伝え、会話するための絵本として成功している。戦前の楽しい学園生活、忍び寄り戦争、看護要員、戦場、死と生、生き残った者の決意が、

ひめゆり平和祈念資料館理事長 本村つる氏 受賞をありがたく思う。子どもにも分かりやすい表現を、証言員全員で議論を重ねた。挿絵の三田さんも証言員の体験談を聞いて生き生きといふ絵を描いてくれた。戦争を体験していない親世代も、子どもと一緒に読んでほしい。

2012年1月23日 沖縄タイムス (提供：沖縄タイムス社)

『絵本 ひめゆり』の誕生

館長 島袋淑子

『絵本 ひめゆり』が、沖縄タイムス出版文化賞児童部門賞を頂けることになった朗報が入った日の感激は忘れることが出来ません。証言員（ひめゆり学徒生存者）や資料館職員みんな拍手喝采をして喜び合いました。

ひめゆり平和祈念資料館は今年で開館23年余になります。資料館は、年中無休で、館内では証言員が戦争体験を話したり、来館者の質問や疑問に答えたりしてきました。各展示室には読んで理解出来るような資料や文章が展示してありますが、小学校低学年の子どもたちには難しいという声もありました。

子どもたちにわかってもらうためにはアニメや絵本をつくってはどうか、という意見が出され、2005年頃からアニメのための話し合いを持ち始めました。まず、絵の公募を行い、たくさんの応募者の中からアニメは海津研さん、絵本は三田圭介さんが原画作者に決まりました。

それから、証言員と学芸員、絵担当の三田圭介さんを交えての話し合いが繰り返し行われました。当初、戦争体験の全くない三田さんが、私たちの話を聞いただけで納得のいく絵が描けるのだろうかという不安もありましたが、三田さんは、一人ひとりの戦争体験を聞くことから始めて、ひめゆり学徒隊のゆかりの壕や戦跡などを訪れ、追体験しながら描いてくれました。時には一枚の絵を何度も描き直してもらうこともありましたが、意見を取り入れて、何度でも描き直してくれました。

証言員の「事実在即してありのままに描いてほしい」という要望に対して、「絵や文章が悲惨すぎると子どもたちは読んでくれないのでは」という意見が出たりして、みんなで場面ごとの絵や文章に試行錯誤を重ね、昨年6月、2か年の歳月をかけて完成いたしました。この絵本が、多くの子どもたちに親しまれ、また、親子でも一緒に読んでいただける事を願っています。

素晴らしい絵を描き上げて下さった三田圭介様、編集・デザイン担当のフォレスト 諸見志津子様、印刷・製本して下さった近代美術の皆様にご心から感謝申し上げます。

最後に、やさしさと命を大事にする子どもたちが育ちますよう、戦争のない平和な時代が続きますよう祈っています。



ひめゆりの心 発信着々

同窓会が財団化継承へ礎

ひめゆり平和祈念資料館 要との考えからだ。 要の責任その一環だ。本を運営するひめゆり同窓会（こし）3月から4月にかけては、こし5月24日、公益財団法人「沖縄県女部」一高女ひめゆり平和祈念財団（本村ツル理事長）86歳）へ移行した。世間平和のため「思はず」ことを新たな理念に掲げ、さまざまな幅広い取り組みを行っている。こし中の充実を目指してアニメの製作なども進めているほか、教育も戦争の関わりなどを調べる平和研究の設立準備を計画している。

「幼い子どもにも読んであげて」 「絵本ひめゆり」

きょうから販売

ひめゆり学徒隊の戦争体験をまとめた「絵本ひめゆり」が23日から、糸満市のひめゆり平和祈念資料館で販売される。構想から4年。作家との戦跡巡りや話し合いを重ねて完成した絵本を手に、元学徒たちは「ひめゆり学徒が使用していた戦跡が数カ所あり、それらの戦争の記憶を伝える戦跡を平和学習の場、未来への遺産として保存し、活用していくために」。また、戦争を知らない世代と子どもたちが平和について考え、避け、憧れのセーラー服を着ることもできる。ひめゆり平和祈念資料館は、戦争を伝えるための絵本が、戦後やスゴッパに励んでいた女生徒たちが、看護要員として戦場に駆け出され、死と隣り合わせの中で必死に負傷兵を世話し、期待する。元学徒たちが学校で親しんだ本や歌は、戦争賛美ばかりだったという。「戦争に巻き込まれて初めて間違いに気付いた。自分たちがどうだったかに、幼い時に読んだ絵本はいつまでも心に残る。戦争は駄目だと感じてほしい」と強調した。

価格は1冊1,000円。同資料館で200部を販売する。完成した絵本に入るとひめゆり学徒隊一那覇市安里

2011年6月23日 沖縄タイムス（提供：沖縄タイムス社）

『絵本 ひめゆり』を振り返って —証言を「書き起こす」のではなく「描き起こす」ということ—

三田圭介

例えば、「爆弾がドーン！と落ちてきて多くの友達を失いました…（仮）」という証言があるとします。

「爆弾がドーン！と落ちてきて」の部分は、実際にご本人がその場所において体全体で感じてきた事だからこそ感覚的、感情的に伝わってくる恐ろしい言葉、「証言」になります。「多くの友達を失いました…」の部分は、証言された方の悲しくて複雑な「思い」がにじみ出ているからこそ、聞き手である私たちにとって心の奥に深く染み渡り、考えさせられる言葉になるのだと思います。

ではこういった「証言」や「思い」を絵本化するにはどうしたら良いのか？

今思えば私はこの点ばかり悩んでいました。描いては捨て、描いては捨てての繰り返し。立ち止まれば沖縄戦の本を読んで心を安定させるという頭のおかしな日々です。自分が経験した事ではないので…（経験なんてとんでもないですが！）ついつい頭でっかちになり、誰かに相談しようにも自分でやるしかないし、いざやってみれば自分が描いたものが全部偽物に見えてしまうのです。

ただ単に証言から絵を描き起こす形だけをとってしまうと、見ている側（受け手側）にとっては、ただ単に説明的、勉強的になりすぎてしまい、退屈極まりない教科書のような物になってしまうと思います。ましてや今回は特に、「戦争を知らない子供たちに伝えられるような絵本にすること」が目的です。「戦争の知識を得たい勉強家たちに向けて」描くものではありません。

さらに、膨大な一人一人の証言の数々を一冊の絵本としてまとめなければならぬといった難しさもありました。誰か一人だけの証言を絵本にするならまだしも、「この人がこういう体験をしていた時、あの人は違う所にいた—」など、絵本化するにあたっては、矛盾点が多く、それら全てを描いていたら絵の枚数は大変な事になってしまい絵本としてもこれではまとまらないのです。

そこで私が暗中模索のなか出した答えが、良い意味で伝わりやすくなるよう「嘘」をつく勇気でした。戦争の事を何も知らない子供たちに向けて分かり易く伝える為につく嘘。さらに嘘をしっかりとつく為には、「証言」と「思い」の両方が非常に大切です。

落語家の方もそうですが、大本となる「話（おおもと噺）」を知り抜いていなければ話芸としての話が成り立たないと思います。

そしてもう一つ重要なのが、その「嘘」を「本当」のように見せていく、繋いでいく「背景」です。

「爆弾がドーン！と落ちてきて多くの友達を失いました…」を使って再度例にあげてみると、爆弾が落ちてきた時の周囲の状況は、その場所には学徒たちだけではなく他にも色々な方々がいたはずで、さらに外の天候は？ 動植物たちはどうか？ ガマの中であれば明るさはどうだったか？ 地面には何が落ちていたか？ 暑かったか？ 血がついたか？ 等、挙げていったらきりがありませんが…これらの細かな要素は、「言葉」としてはそれ程必要のない事かもしれませんが、絵を描く為には必要不可欠な要素となります。

世界は個人一人だけでなく、全体として常に動いていて、決して狭まった事柄だけをそのまま「書き起こす」だけでは作品世界としての「絵」の再現、表現ができません。こうなってくると恥ずかしい話なのですが、自分が役者ようになってその場に立つような気持ちに心を持っていき「描き起こす」しかありませんでした。そして、そうする事によって少しずつ筆が進んでいったのです。

私が『絵本 ひめゆり』を制作する中で皆さんから教わった数々の証言や言葉にならない思いは、今も確実に私の中で生きていて、私にとってかけがえのない大きな宝物です。至らなくて未熟な部分はごめんなさい。

最後に沖縄で見た海はやはり何があろうと綺麗で、「海は世界のあちこちと繋がっているのだ」と思いました。『絵本 ひめゆり』に込められた思いが多くの方々に届く事を祈ります。お世話になった沢山の方々、この場をお借りして「ありがとうございました」。

生存者の願いによってつくられた『絵本 ひめゆり』

学芸課長 普天間朝佳

戦後60年目にあたる2005年前後から、戦争体験を次世代へどう継承していくかが社会的な課題になり、当館でも「次世代プロジェクト」を立ち上げ、様々な取り組みを始めました。「次世代プロジェクト」の柱になったのは、ひめゆりの体験者である「証言員」の証言を映像記録として残そうという「証言映像の記録化作業」と、戦争体験を持たない世代にも理解できる展示を目指した「展示リニューアル」、そして証言員の仕事を引き継ぐ「説明員の採用」の3つでした。

そのプロジェクトが軌道に乗り始めたころ、「戦争体験を、小さい子どもにも伝わるような工夫ができないだろうか」という新たな課題が浮上りました。そして、話し合いを重ねた結果、「アニメーション」と「絵本」をつくることになったのです。

アニメ原画作者の公募を行い、アニメには海津研さん、絵本には三田圭介さんが選ばれました。三田さんの応募作品は、「仲良しのお友だちがいて、楽しい学園生活を送っていたけど、戦争があって、それが終わると、お友だちは死んでしまって、一人だけが生き残ってしまった」というとてもシンプルな内容で、戦闘シーンもほとんどありませんでした。「シンプルなストーリーとメッセージのほうが子どもには伝わりやすい」という三田さんの持論によるものでした。

しかし証言員からは、「それだけでは自分たちの戦争体験は伝わらない、もっと自分たちが体験した事実を具体的に表現してもらいたい」という声が上がりました。その思いを受け、三田さんには、ひめゆり学徒の体験した戦場を再現した絵を何枚も描いてもらうことになりました。

まずは三田さんにひめゆりの証言集や沖縄戦の本を何冊も読んでもらい、証言映像を^み視てもらった上で、絵を描いてもらいました。その絵は、平和な学園、陸軍病院への動員と壕での活動、南部への撤退、解散命令、死の彷徨、友だちの死、収容と百数十枚に及びました。

描き上がった絵に対して、証言員と資料館の次世代職員、そして三田さんとの「事実考証」のやりとりが長い間続きました。証言員は、学徒の服装や髪型、10・10空襲の米軍機の数、病院壕の内部の様子、手術で切断される足の切断部分の位置、傷口に這いずりまわるウジ虫の量、砲弾の爆発の仕方など細部にまでこだわりました。そこには、体験してない者にきちんと伝えようという思いはもちろんですが、正確に残さずにはおれないという当事者ならではの執念のようなものもあったのではないかと思います。

その「事実考証」を経て完成されたたくさんの絵の中から、絵本用に何枚かの絵が選ばれましたが、枚数が多すぎる上に文章が説明的で、絵本として完成しているとは言えませんでした。絵の枚数を絞り込み、文章を書き直し、絵本に仕上げてくださいしたのは、出版社フォレストの諸見志津子さんでした。

絵本に仕上げていく段階でも、証言員、次世代職員、三田さん、諸見さんとの間で話し合いが続きました。特に議論になったのは絵の具象化、細部化をどこまで追求するかでした。前述のように、証言員は自分たちの体験をより具体的に、こまかく描くことにこだわりましたが、議論の結果、子どもたちに伝えるためには抽象的な表現にすることも必要だという見解になりました。その過程は「子どもたちに伝えるにはどう表現したらいいか」ということについて、体験者たち自身が試行錯誤した、大切な過程でもありました。

本書には「主人公」がいません。それは、一つには多くの体験者の体験を集め象徴化された物語になっているということがありますが、もう一つは、たとえ物語への感情移入が弱くなったとしても、一人だけの体験ではひめゆりの全体像は描けないと、証言員たちが考えたからです。

本書は昨年6月23日慰霊の日に発刊され、多くの反響が寄せられました。その反響から、子どもたちへ戦争を伝えるメディアを、多くの人たちが求めているのだということがわかりました。絵本を読まれた方からは「絵になったことで、話だけより、具体的に当時の状況をイメージすることができる」という感想

が寄せられました。

「戦争はとても残酷で悲しいもので、決して起こしてはならないという思いを子どもたちに伝えたい」というひめゆり学徒生存者たちの願いによってできた本です。たくさんの方の手に届いて、読まれてほしいと願っています。

出版話題

ひめゆり平和祈念資料館・文三田圭介・絵「絵本 ひめゆり」

ひめゆり平和祈念資料館がひめゆり学徒隊の生存者の体験を絵本にした。抑えた色合いの表紙。見返しをめくると、緑の木々に囲まれたひめゆり平和祈念資料館が描かれている。真っ白のページに絵本ひめゆりと書かれた扉。本文は、見開き一面「ひめゆり学園」の絵と紹介から始まる。学校生活の様子が楽しいに生き生きとした絵と文で続くが、日付を追って戦争に巻き込まれていく様子が書かれていく。重い内容の話子ども達も理解できるように、ひらがなで簡潔にやさしい文章で書いている。



絵には、三つの山場がある。一つ目は、女学生達が月明かりの中、胸を張り元気に陸軍病院壕に向かう絵。二つ

体験者の思い、次代へ

目、6月18日学徒隊の解散命令が出た壕の中の見開き絵、絵本のちよと真ん中になる。この絵の前後で彼女達の絶望、恐怖の様子が変わる。三つ目、沖縄戦の実相をイメージさせる見開き場面。その後、死んでいった多くの学友、教師達の思いと、生き残った自分達の思いが静かに語られる。初めて読んだ時、陸軍病院での仕事、戦場のリアルな絵に驚いた。子ども達はどうか受け取るのだろうか。けれども、あたたかみの中に、生き残った人達にすれば描くべき絵であったのだろうか。これが戦争の実態なのだ。だとすれば、この絵本に込められた思いを受け継ぐべきであり、戦争を知らない大人達が、小さな子ども達にどう手渡すか、課題は私達にあると思えてきた。読み終えたら最後に必ず、表紙、裏表紙を一面に開いて見て(見せて)ほしい。雲の上の教室の窓から、楽しそうに話しながら手を振る女学生達。何と言っているのだろうか。それを考えるだけでも、絵本にした意義は大きい。(大田利津子・沖縄県子ども本研究会事務局長)

2011年8月14日 琉球新報 (提供：琉球新報社)

◆第18回日本平和博物館会議を当館にて開催

2011年11月17日・18日の2日間、第18回日本平和博物館会議が当館にて開催されました。日本平和博物館会議は、全国各地の平和博物館が協力・連携して平和推進事業を発展させることを目的としています。当館を含めた9館の加盟館で、年に一度定例会を開催し、各館の課題を共有したり、討議を行ったりしています。今回は、埼玉県平和祈念資料館を除く8館の出席となりました。

1日目が定例会にあたり、日本平和博物館会議を広報するための各館の取り組み発表のほか、対



1日目の定例会の様子

馬丸記念館より「沖縄戦の年表には対馬丸事件を入れるという共通認識を加盟各館が持ってほしい」という展示に対する具体的な提議もなされました。

2日目は研修会で、沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号壕と南風原文化センターを見学しました。その後、当館館長島袋淑子が、自らが戦時中に看護要員として勤務した沖縄陸軍病院・糸数分室壕（アブチラガマ）を案内しました。

全国各地の平和博物館が交流し、今後も連携を深めていくための有意義な会となりました。

◆水俣病資料館 語り部の会来館

去った1月29日、熊本県の「水俣市立水俣病資料館 語り部の会」の緒方正実会長を含む8名が来館しました。

語り部の会は、水俣病の歴史や健康被害、それにともなう差別などを伝え、このような公害を世界のどこでも起こしてはならない、と訴える活動を行っています。しかし、患者の方々も平均年齢70歳を超え高齢化し、今後その体験をどう継承していくかについては、沖縄戦と同様の課題を抱えています。そのため同会では現在体験者のみではなく、患者の家族や非体験者が勉強し伝えていく体制もとっています。

一行は、展示見学及び証言員の講話を聞いた後、館長島袋淑子、学芸課長普天間朝佳と意見交換を行いました。同会のメンバーからは、お父さんが水俣病だったが長い間それがわからず、最後は狂い死にしまったこと、水俣病は大企業が相手のため申請するのも大変だったこと、水俣出身を隠したりしたことなど、当事者ならではの話がありました。また、当館の展示に関しては「遺影の一人ひとりは何も言わないが、訴えているのがわかった」という感想をおっしゃっていました。最後に、亡くなった水俣被害者への鎮魂の祈りを込めて緒方さんが手作りしたこけしをご寄贈いただきました。

今後この歴史事実をどう伝えていくかという同じ課題を持つ仲間同士として、とても有意義な機会となりました。



語り部の会の皆さんと当館館長島袋

◆野田佳彦首相来館

2月26日、来館した野田佳彦首相が南部戦跡を訪問し、ひめゆりの塔参拝と当館の展示見学を行いました。

ご案内した館長島袋は、自らの体験も交えながら、戦争のむごさや平和の尊さを伝えました。野田首相は、約40分間説明を静かに聞かれ、「島袋さんもお怪我なされたんですか」、「大変でしたね」などと話されていました。遺影の並ぶ第四展示室では生存者の証言をじっくり読まれました。

多くの報道陣が詰めかけ、物々しい雰囲気の中での対応となりましたが、当館の理念である「戦争のむごさ、平和の尊さ、命の大切さ」を知っていただく大事な機会になったと思います。



展示を見学する野田佳彦首相

◆平和研究会開催（第2回～第4回）

現在、当財団は、平和研究所設立準備の一環として、平和研究会を行っています。第2回（2011年12月12日）は大田昌秀氏、第3回（2012年2月27日）は大城将保氏、第4回（4月23日）は石原昌家氏を講師として開催いたしました。

大田氏は、鉄血勤皇隊としての体験や県知事経験から、軍隊（自衛隊）は民間人を守らないこと、沖縄戦についていくつかの誤認があること、知事時代の「基地返還アクションプログラム」などについてお話し下さいました。大城氏は、沖縄戦時、日本軍による県民スパイ視が軍民雑居状態の沖縄に何をもたらしたか、「命どう宝」の言葉の大切さ、大田県政時代の「平和の森構想」などについてお話しされました。平和研究所設立の際には大学や県とのタイアップを念頭に入れては、との提言もありました。石原氏は、「援護法」の視点で見ると題して資料を基にして話されました。第三十二軍のなかでのひめゆり学徒の位置づけ（衛生勤務要員）や、終戦間もない頃、遺族が国家の戦争責任を問う立場から「援護」ではなく「補償」を望んだにも関わらず国は「援護法」を制定したこと、現在は「沖縄戦体験の捏造」から「沖縄戦そのものの捏造」に変化していることなどについてお話し下さいました。

各回とも、沖縄戦に関する学習と平和研究所設立への提言を頂き、今後の取り組みの参考となる貴重な会となりました。



多目的ホールでの研究会の様子



第2回の講師 大田昌秀氏



第3回の講師 大城将保氏



第4回の講師 石原昌家氏

2012(平成24)年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記の事業を予定しております。

- * 2012(平成24)年度企画展「ひめゆり—収容所から帰郷へ」(2012年11月～2013年3月)
- * 復帰40周年記念 アニメ「ひめゆり」公開上映会&『絵本 ひめゆり』の朗読会
- * 元ひめゆり学徒の夏休み戦争体験講話
- * 第5回ひめゆりガイド講習会(夏予定)
- * 夏休み教員向け講習会(夏予定)
- * ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行(2012年6月23日)
- * ひめゆり関連の戦跡壕の調査
- * 平和研究会の開催
- * 出版事業
『資料集5 収容所から帰郷へ—ひめゆり学徒の証言』(2012年6月予定)
『感想文集ひめゆり』第23号(2012年6月23日)
- * アニメ「ひめゆり」の製作

相思樹

「来館者と資料館をつなぐ感想文」



説明員 尾鍋拓美

当館では開館翌年から毎年、一年間に寄せられた感想文を選定し、一冊にまとめて『感想文集 ひめゆり』を発行している。毎年おおよそ一万数千件以上の感想文が寄せられるが、それら一枚一枚をすべて読み、掲載する感想を選んでいく。開館から二十三年間に寄せられた感想文は四十四万八千九百六十件にのぼる。現在『感想文集 ひめゆり』第二十三号をまとめる作業に追われている状況だ。

見学しての感想はもちろんのこと、自分がここを見学してどう変わったか、日常生活に戻ってから戦争や平和のことを考えていくという決意を、紙いっばいに書いてくださる感想文も多い。昨年は、東日本大震災や福島第一原発事故と戦争を関連して感じたことを書かれているものも多かった。また、少ししか書かれていなくても、ここに来て何か、心が動かされたことが伝わってくる感想文もある。

感想に次のようなものがある。

「ここに来るまで、戦争という(戦死者〇〇万人)と一括りにされて、その亡くなった人たちが一人ひとりであった人生とか、生活を想像することが難しかった。でもこの資料館では、ひめゆり学徒隊の人たちがどのような沖縄戦を体験したのかがわかり、そこにいた一人ひとりの未来ある人生が戦争によって奪われたのだということが伝わってきた」

このような感想は、当館の展示が、元ひめゆり学徒生存者たち自身の手によってつくられていることと大きく関係していると思う。彼女たち自身が戦場で見たこと、体験したことをもとにして展示がつけられているからこそ、このような感想が生まれるのではないだろうか。しかし、体験者がつくった資料館ということは、おそらくほとんどの来館者は知らない。それでも大切なことは展示から伝わっているのだと、感想文を読むと心強くなる。

感想文は展示のメッセージの受け手である参観者と、その発信者である資料館側との重要なコミュニケーションだ。これからも大切に読み、展示や資料館の運営に反映していきたい。

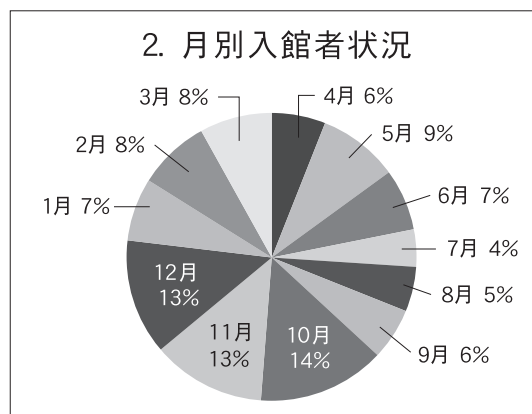
統計に見る2011年度

1. 総入館者状況（入館料免除を除く）

- ・ 昨年入館者は673,799人（前年の694,162人より－20,363人）。1か月の平均入館者は56,150人、1日平均は1,851人（慰霊の日を除く365日）。
→開館以来23年間で21番目の入館者数。
- ・ 開館以来23年間の累計は18,478,166人で、年平均入館者数は803,399人、1日平均は2,235人（ただし、1989年度の開館期間は9か月間）。
- ・ うち外国人は4,391人。

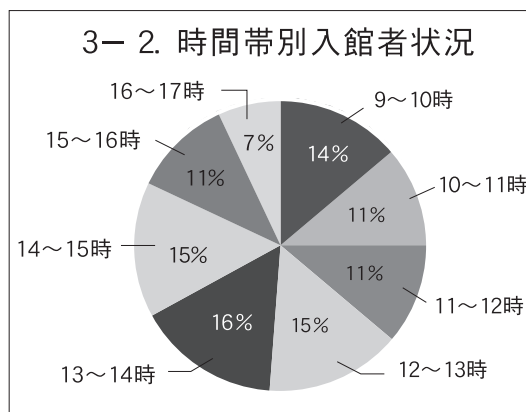
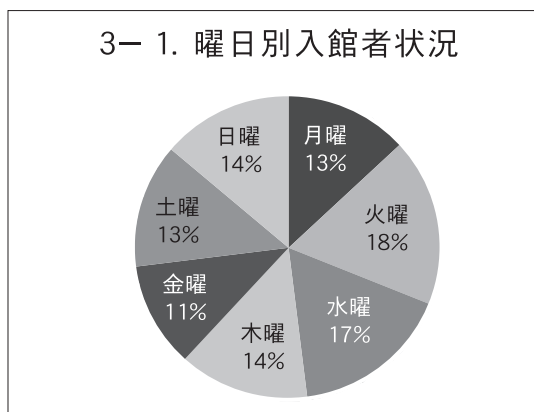
2. 月別入館者状況

- ・ 昨年1年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの10月～12月の3か月間。3か月間の合計は267,864人で、総入館者数の40%（小数点以下を四捨五入。以下同じ）。
- ・ 入館者数が少ない時期は7～9月。3か月間の合計は101,635人で、総入館者数の15%。



3-1. 曜日別入館者状況 / 3-2. 時間帯別入館者状況

- ・ 曜日別では、週半ばの火・水に集中している。
曜日別：月13%、火18%、水17%、木14%、金11%、土13%、日14%。
- ・ 時間帯では、12時台から15時台までの午後の早い時間帯が少し多い。

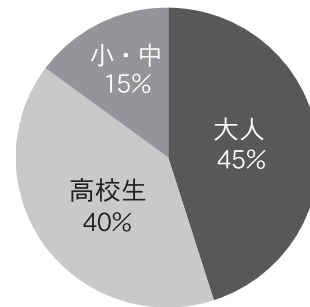


4. 類別入館者数

【総数】入館者の割合は、大人45%、高校生40%（そのうち98%が団体で入館）、小・中学生15%（そのうち76%が団体で入館）。23年間の平均では、大人が67%、高校生22%（そのうち94%が団体で入館）、小・中学生11%（そのうち63%が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が68%と高く、次いで小・中学生20%、大人12%となっている。

4. 類別入館者状況（個人・団体含む）



5. 学校団体の入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,413校、342,054人（前年の2,303校、315,276人に比べ+110校、+26,778人）。内訳は、小学校が88校で4%、中学校が828校で34%、高校が1,497校で62%。

【地域別】

- ・全体では、関東32%、近畿16%が多い。
- ・小学校は、沖縄54%、九州22%、関東11%の順に多い（前年は沖縄56%、九州18%、関東10%）。
- ・中学校は、近畿37%、中国18%、九州15%の順に多い（前年は近畿35%、中国17%、九州16%）。
- ・高校は、関東50%、東海15%、信越8%の順に多い（前年は関東48%、東海17%、信越8%）。

【都道府県別】

- ・小学校は、沖縄47校、鹿児島17校、東京4校の順に多い。
- ・中学校は、大阪96校、岡山84校、兵庫80校、熊本54校の順に多い。
- ・高校は、東京212校、神奈川132校、千葉89校、埼玉89校の順に多い。
- ・全体に占める沖縄の中学・高校の割合は、それぞれ中学3%、高校0.3%

【月別】

- ・10月21%、12月19%、11月17%、5月11%の順に多く、4か月間で全体の68%を占める。
- ・小学校は、10月25%、6月22%、7月13%の順に多い。
- ・中学校は、5月40%、6月18%、4月16%の順に多い。
- ・高校は、10月25%、11月21%、12月21%の順に多く、3か月間で全体の67%を占める。

6. 入館料免除

入館料免除総数 39,134人

団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	179団体／10,249人（うち引率者1,443人）
修学旅行下見	681校／1,883人
学校団体引率者	22,057人
個人免除者（身障者手帳等提示の方）	2,133人
慰霊の日（6月23日）	2,812人

※沖縄県内学校団体は、入館料免除のため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

※2011年度より、入館料免除数に、「学校団体引率者」「個人免除者（身障者手帳等提示の方）」を新たに加えた。

仲宗根政善日記抄(46)

[1980年] 三月十一日

仲程君、玉城君二人といっしょに、ひめゆりの塔の説明碑の写真とりに行った。途中、久しぶりに白梅の塔に立寄った。木麻黄^{モクマオウ}が切り倒されて境内は以前よりあかるくなって、洞窟のそばの祠は赤瓦で葺きかえられて、白い漆喰いがかがやいている。暗い壕とはふつり合いに見える。いつ来ても、森閑としている。心をこめて祈りに来るのはおそらく絶えないであろう。しかし、生き残りの者や、遺族たちがだんだん減って行く^とと顧みるものもなく荒廃して行くのではないかと気遣われる。もう瑞泉之塔や梯梧塔などが同窓生も少ないために草におおわれている。しかし、これらの塔はまだ心をこめた人々だけによって守られ、祈られて、乙女らはやすらかに眠っている。

生き残りの者たちは、ひめゆり塔に人々の集まることをうらやましがっているともいう。私はむしろ静かにこの塔のようにして亡き乙女らをねむらせたい。ここでは心をこめて祈りをささげることが出来る。不純のものは一つもなく聖域という感じがある。

数年前、十数木も植えた鳳凰木はたった三本しか伸びていない。一本は塔の前右側にあってすっと伸びおり、一本は左脇にある塔のそばに伸びている。もう一本のその塔の前に立っている。周囲の木麻黄に光をさえぎられているためであろう。予想したほどは生長していなかった。それでも三本がのびていて、乙女たちにいささかの手向けになる。

白梅の塔を去って、真壁を通り、ひめゆりの塔にむかった。塔の前は、観光客がいっぱいだ。一時も絶えることなく人の波がつづいている。まるで、お祭りのようだ。ひめゆりの塔の記を写真をとろうとして、シャッターをきろうとすると、絶えず観光客がレンズにはいる。いくら待っても人波はたえそうにない。しばらく優美堂で休憩して帰って来たが、やはり同じだ。とうとう方向をかえて、わ

ずかに碑面だけを写した。海洋博のときもそれほどではなかった。説明碑に写真機をむけていると、つぎつぎとその前にポーズをかまえて、写真をうつして行く。碑を読むでもなくまるで腰掛けみたようになっている。

一体、何のためにこのひめゆりの塔を建てたのかしらとも思う。

この塔が出来てから、真和志村民は、米須の海岸のテントムラを引きあげて、豊見城村嘉数へ移動した。

二人の令嬢を失った金城文子女史は、真和志村民が移動した後、この塔が草にうもれてしまい、かえりみる人もなく荒廃して行くことを憂えて、つぎの歌を板ぎれに書いて小松の枝にかけてあった。

いつの日も花をたやすな村じゃ人

天つ乙女の姫百合の塔

しばらくの間は、とぶらう人もなく、草にうもれていた。しかし、やがて本土からも渡航が自由になり、訪ねる者は、卒塔婆を立て参拝記念の札を立て、まるで墓場のように陰惨を極めた。

私が群馬政府文教部にいたときであった。儀間真一という真面目そうな二世の青年が訪ねて来て、相談を持ちかけた。乙女らが最期をとげたあの場所をそのままにほっておいてはすまない。もし土地購入の資金がいるのであれば、考えてあげたいということでした。彼のジープに乗って二人はさっそくひめゆりの塔に出かけた。彼が気づかっている通り、壕の前まで地主たちが、勝手に施設をしそうな様子であった。彼は二千ドルの資金を私に渡してくれた。いくらか、友人からも寄付を集めたようでしたが、ほとんど自分の金であった。土地購入については、地主が、売らないと言いはったり、地価をつりあげたりしてトラブルがあったが、金城和信氏が、島尻郡村長会に協力を要請したり、長嶺春女史が交渉にあたりたりして、どうやら、二千余坪の敷地を購入することが出来た。儀間君

は、さらに、周囲を石塀でかこってくれた。金のくさりもつけた。自動車のヘッドライトで照らしながら、夜、人夫といっしょに働いて、くさりをはったともいう。ところが、やがて、スクラップブームが来て、くさりは盗みとられてしまった。なお塔の入口から、壕の前まで、国頭の河原の砂利で敷きつめるように、請負師と契約したが、それも金だけをとって実行しなかったという。沖縄の心ない人々を、儀間君は憤っていた。

自らの篤志をほこることもなく、かげで亡き乙女たちのために心をつくして働いてくれた。

そのご好意に謝するため、玉那覇正吉君に依頼して、君の肖像画を描いてもらって贈った。

その後、君は音信をたった。ハワイに帰ったのであろうと思った。□□〔ブランク〕年〔注1〕ハワイ大学の東西文化センターで一年半研修することになって、ハワイに一年三か月ばかり滞在した。人ごとに彼の消息を訪ね、新聞でも探して見たが、とうとう消息をつきとめることが出来ずにいた。

金城和信氏がなくなり、タイムス紙上に「金城和信氏を悼む」文を書いたときに、儀間真一君の消息を知っている方は知らせてほしいと、付記しておいた。ところが、長く探し求めていた儀間君の消息を、二女の正子がずっと前から知っていて、新聞を見て知らせてくれた。燈台もとくらしとは全くこのことである。

久しぶりに電話で話した。喜びがこみあげて涙がにじむ。善良なその声が流れて心にしみる。

犬をたくさん飼っているそうだがと、冗談にはなしかけると、いや好きで飼っているではありません。米兵たちは、ここに滞在する間は犬を飼ってかわいがっているのだが、帰るときは、みんな放って行く。それが野良犬にな□〔判読不能〕って、さまよっているのが気の毒なばかりに、集めて飼っているのだという。その経費も相当のものらしい。暇のときにぜひお会いしたい。しらせるといったが、その後また音沙汰がない。住宅には、猛

犬が四、五十匹もいるのでうっかり行けないといわれて、そのままになっている。

仲程君、玉城君と人足のとぎれるのを写真機をかまえながら待ったのだがとぎれることがない。入口の塀の側面に「二千余坪の聖域寄贈 儀間真一」と刻まれてある。それを写真におさめた。

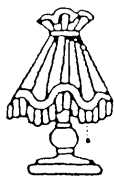
そばに、「ここで商売行為は一切禁ずる」との立看板が立っている。そのそばで、花を売っている女が立っていた。この看板を見ているかと尋ねると、見ていますという。何がわるいかわらんばかりの反抗の眼をいからせている。一方にはみすばらしい老婆がしゃがんでいて花を売っている。おばあさん、こんなことをしてもよいことはありませんよというとしぶしぶ立ち去って行った。追えども蠅のようにたかる花売たちにも手をやく。塔の前には、商魂逞しい者どもが、むらがっている。塔前で心を込めて祈りをして下さる者がいるかと思うと、塔に尻をむけて自分らの写真をとって帰るだけのものもいる。人間のさまさまの心が、亡きおとめらの前でむき出しになっている。やすらかにねむれと祈りをこめているのだが、霊はやすらかでありうるのか、さびしく人波の流れを眺めて立ちつくしていた。

※読みやすさに考慮して、字句を補った箇所がある。

また、明らかな誤字は改めた。

※〔 〕は編集で補った。

※〔注1〕仲宗根がハワイに滞在したのは1963年3月から1964年7月



本棚

(元琉球大学教授 仲程昌徳)

(文／ひめゆり平和祈念資料館 絵／三田圭介) 『絵本 ひめゆり』

2011年6月15日付『沖縄タイムス』は、「『ひめゆり』絵本 慰霊の日に発刊」の見出しで「ひめゆり平和祈念資料館（島袋淑子館長）は、沖縄戦の悲惨さや平和の大切さを伝えようと初めて、ひめゆり学徒隊の絵本を23日の『慰霊の日』に発刊する。（中略）『絵本 ひめゆり』（40ページ）は従来の展示だけでは、子供に戦争を理解してもらうことが難しいことから、生存者と戦後世代の資料館職員が議論を重ね2年がかりで製作した。沖縄戦前の楽しい学園生活から、戦場に駆り出され、死線をさまよった体験を描いた」ものであると報じていた。同日『琉球新報』も「『ひめゆり学徒』絵本に『親子で見てほしい』」の見出しで「ひめゆり学徒隊で生き残った人たちの証言などを基に作られた絵本『ひめゆり』が23日から糸満市の平和祈念資料館で発売される。学徒らによる子供向けの絵本が作られるのは初めて。／ひめゆり学徒隊は、沖縄戦で陸軍病院に看護要員として動員された沖縄県女子師範学校と、県立第一高等女学校の生徒ら。絵本では学徒隊が動員され、陸軍病院での看護や解散後に銃弾から逃げる日々、そして終戦までと戦争の悲惨さ、平和の尊さを描いている。／同館の展示物の説明では『陸軍病院』などの言葉が子どもには理解しにくいのでは、という意見が以前からあり、子どもにも分かりやすいように絵本を作ろうと、約2年半前から制作が始まった。月に2回ほど集まり、ひめゆり学徒隊の生存者から意見を出し合ったことで、当時の状況をより鮮明に描いた絵本を作ることができた」と報じていた。『琉球新報』はまた7月20日「非体験者に記憶つなぐ『絵本 ひめゆり』など発刊」の見出しで、『絵本 ひめゆり』『ずるせん—女学生たちの最前線—』が発行されたことを報じた記事の中で「『絵本 ひめゆり』はひめゆり祈念資料館のみの販売にもかかわらず、初日だけで300冊が売れた。これまでと大きく異なるのが、県内からの反響。教師や親たちから『読み聞かせに使いたい』という声相次いだ」と報じていた。

『絵本 ひめゆり』は、第32回「沖縄タイムス出

版文化賞（児童部門）」を受賞。2012年1月23日付『沖縄タイムス』は、「選考経過」で「親も子も沖縄戦を知らない世代となった今、時宜をえた出版といえる。これまで同じ思いで書かれた絵本も多くあったがこの本は、沖縄戦の実相を伝え、会話するための本として成功している」といい「絵本の構成も良い。見開き一面絵のページが印象的に使われている。絵と文字のバランス、文章の位置など、丁寧に創られた絵本である」と賞賛していた。

ひめゆり学徒隊の戦争体験を、絵本にしたことの意義は決して小さくない。それは、新聞報道及び沖縄タイムス出版文化賞「選考経過」に見られる通りであり、時代の雰囲気と現場の表情をよく伝える「絵」とともに、賞賛を惜しむものではないが、あえて二、三気になった点について触れておきたい。

その一つは、「ことばづかい」について。絵本の対象を「小学校1、2年生程度」にしたことで仮名書きが多くなったこと自体決して悪いことではない。原則を守ってのことだろうが、ルビをふった漢字の使用範囲をもう少し増やしてもよかったのではないか。

その二は、「ひめゆり学園に、かよっていたころ」という表現について。確かに「かよっていた」生徒たちもいた。しかし、「学寮」があったことからすると「かよっていた」というのは、少し違和感がある。

その一、二は、ともかく、是非検討して欲しいことがある。南風原から南部に撤退していく行程が抜けている点についてである。勿論、その間のことについて、どうするかという議論はあっただろうし、ページ数等の関係があつてけずってしまったのではないかと思われるのだが、病院壕に「アメリカぐんが せまってきました」のあとすぐに「6月18日の夜」になるのは、飛躍しすぎる。

絵本が、版を重ねることはまちがいない。その際、増補改訂を考えてもいいのではないか。そうすることで、さらに充実したものになっていくと思われるからである。

声

国とは人々が幸せに暮らすためのもの

静岡県 女性 高校生

初めてお手紙さしあげます。

先日修学旅行でそちらを訪ねさせていただいた際に、感想を書くことが出来なかったため、拙いながら手紙を書くことに致しました。

私は今16歳で、当時ひめゆり学徒であった方々と同じ年頃です。

そちらで学徒の方々や先生の遺影を拝見させていただいて、今の私と変わらない少女達だったのだと思うと何ともいえない気持ちになり、私と彼女達との違いは時代だけなのだと痛感します。

私は、愛国心は大切だと考えています。

今日の日本人の愛国心の欠如を嘆いてもいます。

しかし、ひめゆり学徒の方々が受けた教育が正しいわけではなかったと私は教えられました。そして、今の私はこう思っています。

国とは人々が幸せに暮らすためのものだろう。

国とは民のためにあるべきものだろう。

ひめゆり平和祈念資料館を訪ねて、改めて、戦争は二度と繰り返してはならないと感じ、再び同じ過ちを繰り返さない様に、生きていかなければならないと考えることができました。

最後に、私の様な戦争を知らない世代のために辛い記憶を教えて下さった方々と、改めて様々なことについて考える場を与えて下さった方々に、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

資料館の動き (2011年11月～2012年4月)

- 11月17・18日 第18回日本平和博物館会議を当館にて開催
- 26・27日 第11回平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会へ職員を派遣
- 12月12日 第2回平和研究会開催(講師:大田昌秀氏)
- 2012年1月4日 韓国の高校(以友高校)へ初めて平和講話を実施(館長島袋淑子が対応)
- 14日 南風原平和ガイドの会へのガイド講習会実施
- 24日 『絵本 ひめゆり』の沖縄タイムス出版文化賞受賞にともない、授賞式に理事長以下館長、証言員、職員出席
- 29日 水俣市立水俣病資料館 語り部の会来館
- 2月13日 ひめゆり戦跡壕の調査保存に関する合同会議
- 27日 第3回平和研究会開催(講師:大城将保氏)
- 3月10日 沖縄県観光ボランティアガイド友の会へのガイド講習会実施
- 22日 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団理事会・評議員会開催
- 27日 教員講習会に向けた意見交換会
- 4月23日 第4回平和研究会開催(講師:石原昌家氏)

資料館ガイド

◆資料館ご利用案内

- ①入館受付 午前9時～午後5時 閉館 午後5時25分
- ②休館日 年中無休
- ③入館料 大人¥300 高校生¥200 小・中学生¥100
団体割引 20名以上 10%引き
- ④交通 那覇から糸満市行きバス⑧9で約30分、「糸満バスターミナル」バス下車。さらに糸満バスターミナルから⑧2⑩7⑩8のバスで約15分、ひめゆりの塔前バス下車。

◆平和講話・証言ビデオ「平和への祈り」視聴ご案内

【講話】 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00

【ビデオ】 9:10 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※毎週月曜日・年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 最大収容人員：200人（席）
- 資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。
- ホールは講話・ビデオ以外の目的（セレモニー等）には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせていただくこともございます。

◆VTR室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25分）
- ◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30分）
- ◇「ひめゆりの戦後」（33分）
- ◇「戦火に消えた21の学園」（26分）



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第49号

2012（平成24）年5月31日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

資料館 ☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100

財団事務局 ☎ 902-0067 沖縄県那覇市安里 388-1 ☎ 098-884-1115

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>
